



復古絵本絵ばなし集

ほろろ出版

大正期2

平気の平太郎

昭和6年 文・画：岡本一平 采文閣刊

大正7年から雑誌『良友』に連載されたものが昭和6年に単行本化された。著者の岡本一平は、漫画漫文というスタイルを考案して、漫画という言葉が現代の意味に近づけた。

『平気の平太郎』は、何事にもおどろかない少年の話を、痛快な文章と絵で描いたもの。

おやの正チャンの冒険 5の巻・6の巻

大正14年 文：織田小星 画：東風人 朝日新聞社刊

正チャンの其後

大正15年 文：織田小星 画：東風人 朝日新聞社刊

文を書いた織田小星は朝日新聞社記者の織田信恒、絵を描いた東風人は画家の樺島勝一。2人は大正12年に『アサヒグラフ』で「正チャンの冒険」の連載を始めた。

簡素な線画の4コマ割りが十数日続くと一篇をなす形式。ストーリーは、行動的な正チャンと従者のリスが冒険旅行にでかけ、ふしぎな国でふしぎな体験にあって、弱気を助けて強気をくじく結末に至る。

象の子

大正15年 文：北原白秋 画：岡本帰一 アルス刊

北原白秋による童謡集。大正11年に書いて、翌年の1月に雑誌『女性』に載ったものが主になっている。内容は、異国風のもの、長崎キリシタンもの、『世界小学読本』のお話から材料をとって童謡にしたものなどになっているが、どれも翻訳ではなく、白秋が創作した。

岡本帰一は岸田劉生の親友で、雑誌『金の船』や『コドモノクニ』で活躍した画家。

大男と一寸法師

大正14年 文：楠山正雄 画：河目悌二 富山房刊

児童文学の草分である楠山正雄が書いた「画とお話の本」シリーズの第3巻。このシリーズは難易度順に学年別6冊となっており、それぞれ別の画家が絵を描いている。

『大男と一寸法師』では、親指小僧のような小さな男の子がでてくる話と、大男がでてくる話を7編収録している。